

ドイツ人留学生の三重大学への留学動機†

松岡 知津子*・服部 明子*2

三重大学地域人材教育開発機構*・三重大学教育学部*2

本研究では、本学にとって、もっとも活発に交流が行われてきた国の1つであるドイツに焦点を絞り、平成28年10月に本学に交換留学生および大学推薦の日本語日本文化研修生として来日したドイツ人留学生3名に半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、彼らがどのようにして本学を選んだのか、本学においてどのような活動を行っているのか、本学にどのようなことを期待しているのかを調査した。その結果、留学生たちは本学留学にあたって、具体的な目標を設定していたこと、本学における日本語教育の課題、協定大学との教育研究システム面における課題などが明らかになった。また、本学学生がドイツへ留学する際に求められる出発前教育および留学生の来日前教育の重要性や、協定大学間における教師交流の有効性についても指摘した。

キーワード：ドイツ人留学生、留学動機、留学前教育、教師交流

1. はじめに

本学は、平成8年から交換留学生の派遣を、平成11年から交換留学生の受け入れを行っている。中でも、ドイツはもっとも盛んに交流が行われている国の一つであり、今後も活発な交流が期待されている。

本稿では、平成28年10月現在で本学に在籍しているドイツ人交換留学生3名にインタビューを行い、ドイツ人留学生の本学への留学動機と本学における活動、今後本学に期待することなどを明らかにした。

次節では、まず本学における国際交流の実績から、特にドイツの大学および研究機関との交流がどのように行われてきたかを概観する。3節では、研究の方法と調査対象について述べる。4節では、3名の学生に対するインタビューの結果から、ドイツ人留学生の本学への留学動機や本学における授業以外での活動、本学に求めるものをまとめる。5節では、これまでの結果から、今後の可能性と課題について検討し、本学が交換留学生の受け入れおよび派遣のために、今後どのようなことを行っていくべきか、提言を行う。

2. 本学の交流協定校と交換留学

2.1. 本学の交流協定のあゆみ

本学がはじめて交換留学生を受け入れたのは平成11年であった。当時の交換留学生は4名であり、う

ち3名がタイから、1名が中国からであった。その後、平成13年にはじめてオーストラリアからの留学生を受け入れ、平成14年にはじめてドイツからの留学生を迎えた。その後も、徐々に交流協定校を増やしていき、平成28年には、134名もの留学生を受け入れている。現在、本学は38ヶ国114の大学および機関と交流協定を結んでおり、これまでの受け入れ交換留学生数は合計860名に及ぶ。

過去10年の本学における留学生の総数と交換留学生の受入数の推移を表すと、以下のようである。

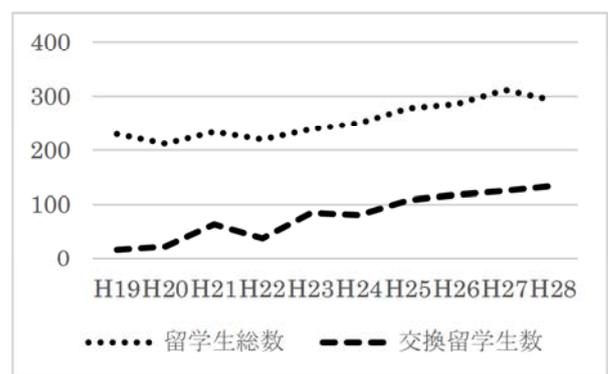


図1 本学における留学生総数および交換留学生数

平成19年の時点では、本学の留学生全体の230名に対して、交換留学生はわずか17名と、全体の留学生の10%にも満たなかった交換留学生の割合が、

平成 28 年の時点においては、293 名中 134 名と、本学全体の留学生の半数近くを占めていることになる。

本学からの留学生の派遣に関しては、受け入れよりも 3 年早い平成 8 年に開始された。派遣の初年度は、年間 4 名であり、その後も横ばいの状態が続いた。平成 26 年に初めて 20 名を越えたものの、その後も 10 名程度にとどまっている。つまり受け入れ留学生数の大幅な伸びに比べて、派遣は大きな伸びが見られず、平成 28 年 10 月現在においては、本学から海外の協定大学に留学している学生は累計 142 名にとどまっている。これは、受け入れの 860 名に比べると、非常に少ないと言えるだろう。

本学におけるこれまでの交換留学生の受け入れおよび派遣について、過去 10 年の推移を表すと以下のようなになる¹⁾。

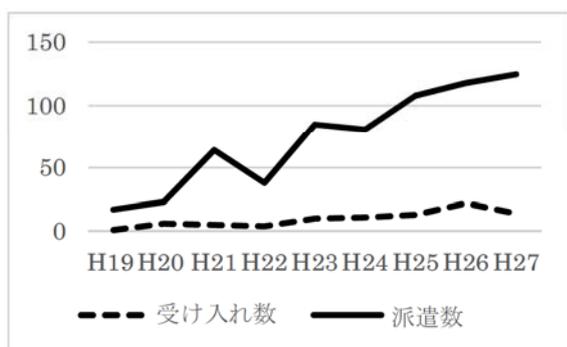


図2 本学交換留学生の受け入れと派遣数

図2からも分かるように、東北地方太平洋沖地震が起きた平成 22 年を除いては、交換留学生の受入数はおおそ増加の傾向にある。しかし、本学から海外の交流協定大学への交換留学の派遣に関しては、大きな伸びは見られないことが分かる。

これまでの受け入れに関してしてみると、中国の交流協定校からの累計 378 名を筆頭に、ドイツ 103 名、韓国 98 名、タイ 76 名、フランス 37 名となっている。これまでの派遣の累計に関しては、ドイツへの 29 名がもっとも多く、続いて中国 17 名、韓国 15 名、スウェーデン 10 名、台湾 10 名となっている。

上記のことから、受け入れに関しても派遣に関しても、本学にとってはドイツの交流協定校が密接な関係にあることが分かる。特に、近年は「内向き志向」で外に出たがらない大学生が増えていると言われる中で、他国に大差をつけてドイツに 29 名もの学生が留学したことは特筆すべきことではないだろうか。

以下では、2.2.において、本学とドイツの交流協定校およびこれまでの交流実績についてより詳しく見ていきたい。

2.2. ドイツの交流協定校との交流実績

本学がドイツの大学と協定を結んだのは、平成 13 年のエアランゲン・ニュルンベルク大学が最初である。その後、平成 20 年にハイデルベルク大学、平成 23 年にボーフム大学、平成 24 年にブラウンホーファー研究機構およびライプツィヒ大学と交流協定を結んでいる。また、学部間交流においては、平成 16 年から本学医学部とロストック大学医学部が、平成 26 年には医学部とフライブルク応用科学科トリック大学が、平成 27 年には工学部とロイトリンゲン大学工学部との交流協定が結ばれている。つまり、平成 28 年 11 月 1 日現在において、5 つの大学と大学間交流協定を、3 つの大学および研究機関と部局間協定を結んでいることになる。これは、中国の交流協定校（大学間協定 15 校、部局間協定 8 校の合計 23 校）に次いで、二番目に多いことになる。

ドイツの交流協定校からのこれまでの受け入れの内訳を見てみると、ハイデルベルク大学から合計 39 名、ボーフム大学から 27 名、ライプツィヒ大学から 20 名、エアランゲン・ニュルンベルク大学から 16 名、ロイトリンゲン大学から 1 名となっている。

そして、これまでの本学からドイツの協定校への派遣先の内訳は、ハイデルベルク大学が合計 15 名でもっとも多く、続いてエアランゲン・ニュルンベルク大学が 9 名、ライプツィヒ大学が 3 名、ボーフム大学が 2 名となっている。つまり、受け入れにおいても派遣においても、ハイデルベルク大学がもっとも多いことになる。

このように、本学と密接な関係にあるドイツの交流協定校であるが、それではいったい、本学で学ぶ交換留学生たちは、どのようなことを考えて本学への留学を決意し、本学ではどのような活動を行っているのだろうか。また、本学に期待することは何だろうか。

3. 研究の方法と調査対象

上記の問題に対する答えを明らかにするべく、2016 年 10 月に来日した 3 名のドイツ人留学生を対象にインタビュー調査を行った。この 3 名に絞ってインタビューを行なった理由は、以下のとおりである。まず、この 3 名は、過去に一定期間日本に滞在した経験を持つ。そのため、留学の動機につ

いて、ほかの学生よりも明確な目的を持っていることが予想されたためである。次に、日本語による意思疎通が可能であるからである。

調査の前に、あらかじめ「留学の動機」「ドイツの所属大学と本学国際交流センターの日本語授業の違い」「本学における活動」「来日前に自国で行った準備」「本学に期待すること」といった、いくつかの質問を準備しておき、インタビューの段階で協力者の回答によってさらに詳しくたずねていくという半構造化インタビューの手法を用いた。

インタビューは、留学生が本学の生活や日本語クラスおよび学部や研究科における授業の登録、変更などがある程度落ち着いたと考えられる平成 28 年 10 月下旬に、調査者と対象者が 1 対 1 で実施した。場所は、本学総合研究棟Ⅱの個室である。インタビューには IC レコーダーを用いた。インタビューに要した時間は、それぞれおよそ 50 分であった。使用した言語は基本的には日本語であったが、調査協力者が日本語を忘れて、うまく表現できないと思ったりした場合には、ドイツ語も用いるよう促した。3名の学生には、事前にインタビューの主旨を伝えた。また、本稿のデータおよび記述内容を確認し、了承を得た。

インタビューに協力してくれた3名の学生の母国での所属と本学における所属および交換留学の種類、本学で平成 28 年 10 月 4 日、5 日、6 日に実施した J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) と呼ばれる日本語テストの点数に基づいて振り分けられた日本語レベルをまとめたものを、以下の表 1 に示す²⁾。

表 1 調査協力者の所属と日本語レベル

	出身大学	本学での所属 および交換留学の種類	日本語 レベル
A	ライプチッ ヒ大学	人文社会学研究科 特別研究生	上級
B	ハイデルベ ルク大学	国際交流センター 日本語・日本文化研修生	中級 2
C	ハイデルベ ルク大学	人文学部 特別聴講生	中級 2

平成 28 年 10 月現在、本学にはドイツの協定校からの留学生が 11 名在籍している。現在在籍しているドイツ人留学生の留学期間および所属、本学における身分、そして母国における大学名を示すと、以

下のようなになる。

表 2 H28 年 10 月現在本学在学中のドイツ人留学生

	留学 期間	所属	身分 ³⁾	ドイツの大学
1	1 年	人文学部	特聴生	ボーフム
2	1 年	人文学部	特聴生	ボーフム
3	1 年	人文学部	特聴生	ボーフム
4	1 年	人文学部	特聴生	ボーフム
5	1 年	国際交流 センター	特聴生	ライプチッヒ
6	1 年	人文社会 学研究科	特研究生	ライプチッヒ
7	1 年	人文社会 学研究科	特聴生	ライプチッヒ
8	1 年	人文学部	特聴生	エアランゲン
9	1 年	人文学部	特聴生	ハイデルベルク
10	半年	工学部	特聴生	ロイトリンゲン
11	1 年	国際交流 センター	日研究生	ハイデルベルク

本研究では、母国で日本語を専門としている交換留学生および日本語・日本文化研修生のうち、平成 28 年 10 月に来日し、1 年の留学を予定している 3 名の留学生を対象とした。

4. 調査結果と分析

4.1. 本学への留学動機と来日前の準備

A さんに関しては、かならずしも本学を希望していたわけではないという。A さんの所属するライプチッヒ大学では、学部 2 年が終了した時点で 8 割の学生が日本の協定大学に留学するという。ライプチッヒ大学には、日本の協定交流大学が 7 校あるが、A さんは 7 校中 5 校目として本学を希望したとのことであった。残り 2 校は、経済的な理由で積極的に留学を希望しなかったとのことであり、A さんにとって、本学は希望した大学の中では最下位であったという。それは、本学の地理的条件のほか、過去に本学に留学していた友人から、本学の日本語のクラスが充実していないという情報を得ており、日本語学習にも力を入れたかった A さんには本学が魅力的に映らなかったのだという。

しかし、大学院生である A さんは、その分自分の研究のために時間を費やすことが出来ると考え直したという。また、受け入れ先になる人文社会学研

究科で開講されている授業を調べ、自分の学びたいものが学べる環境にあることが確認できたため、最終的に本学への留学を決意したという。

一方、BさんとCさんにとっては、本学が第一志望であったという。ハイデルベルク大学で日本学と情報学を専攻しているBさんは、文部科学省の奨学生である日本語・日本文化研修生として来日した。Bさんの所属するハイデルベルク大学においても、同プログラムの奨学金が受けられる留学先としては6校可能性があったが、今回Bさんは本学を第一志望としたとのことであった。その理由は、本学の地理的な要素が大きかったようである。詳細は4.1.1.で述べる。

Bさんは、文部科学省の日本語・日本文化研修プログラムに合格したという知らせを受けたのが2016年6月であったが、それから10月までの間に本学についてインターネットで情報を得たという。例えば、本学や津市の祭り、風景などを調べたという。Bさんは、前もって三重についての偏ったイメージを作ってしまうまいかと考え、過去の本学への留学生に尋ねたりして準備に力をいれることはあまりしなかったという。ただ、来日してみて、本学の授業に関しては、もう少し事前に調査すべきだったと感じているという。それは、ハイデルベルク大学と三重大学の日本語教材や授業方法が異なるからである。つまり、三重大学でどのようなカリキュラムでどのような教材が使われているのかなどを事前に調べておけば、より効果的に授業を受けることができたと考えているのだという。

ハイデルベルク大学で民俗学と日本学を専攻しているCさんは、本学で特別聴講生として本学人文学部に在籍しているが、Cさんも、Bさん同様に本学を第一志望としていたとのことである。Cさんもまた、Bさんと同じく、地理的な要因のほか、数年前に本学に留学したことのあるハイデルベルク大学の親しい友人が強く勧めたことも大きな理由になっていると述べた。

Cさんは、来日前に寮費や物価などを調べたり、インターネットで三重や三重大学の写真を検索したりするなどしたという。その他、上述のBさんとも情報交換をしたりしたという。

4.1.1. 地域・経済的な問題

Aさん、Bさん、Cさんの3名に共通して、本学を積極的に選んだ理由または選ばなかった理由として、地理的要因が関係していた。つまり、地方都市

であることをマイナス要因と捉える者もプラス要因と捉える者もいたということである。

Aさんには、三重県および本学の地理的要因はマイナスに働いた。Aさんは、過去に他大学への留学経験を持つが、そこから東京へ行くバスも多く、大変便利だったそうである。しかし、津市からは、現在1日1本しか夜行バスが運行されていないため、不便だと感じているとのことである。大阪、名古屋は近いものの、その他の都市への移動は不便であると感じている。ただし、キャンパスのすぐ近くに海があるので、散歩することができることは気に入っているとのことであった。また、物価が安いことについては、高く評価していた。

BさんもAさん同様に、過去に日本におよそ1年滞在した経験を持つ。Bさんは、留学ではなくワーキングホリデービザで日本各地に滞在したという⁴⁾。当時、東京のような都会では日本語を使わなくても生活ができると感じ、今回はできれば日本語に多く触れられるような環境に留学したいと感じたのだという。Bさんにとっては、津市は田舎すぎず、ある程度自分の好きなものを手に入れることができるため、ちょうど良いと満足しているとのことであった。

同様に、Cさんも過去に2度日本に滞在した経験を持つ。2度とも3週間程度の短期滞在であったが、そのうち一度東京でホームステイを経験した。その際に、東京は物価が高すぎるため、自分には地方都市のほうがよいと考えたとのことであった。

4.1.2. 言語学習について

上述した通り、Aさんは、過去に本学に留学した経験を持つ友人たちから本学の日本語コースが満足いかないという情報を得ていたため、本学への留学が決定した時、日本語クラスについてはあまり期待していなかったとのことである。ただし、他大学に留学していた当時、日本語能力試験N2に合格したため、今年は是非その上のレベルである日本語能力試験N1に合格したいという目標を設定して来日したという⁵⁾。日本に留学したのは、当然のことながら、「遊び」ではなく日本語力のさらなる向上を目指しているということであった。

Bさんも、Aさんと同様に、今回の留学中に日本語力のさらなる向上を目指しているという。前回の日本滞在時は、日本語を話す必要がない環境にあったため、日本語を真剣に学ばなかったのだという。そこで、今回は日本語力の向上を目標の一つとして留学した。また、できれば本学の日本語の授業のみ

ならず、地元の人とも触れ合いながら、日本文化や、Bさんが強い関心を持つ神道の話などについて話せるようになりたいと考えている。

Cさんは、本学で学ぶ日本語に加えて、アイヌ語にも強い関心を持っているという。ハイデルベルク大学でアイヌ語の授業を受講していたCさんは、日本留学中に北海道を訪れ、アイヌ語やその文化を直接体験したいと考えているという。

4.2. 本学における活動

4.2.1. 日本語クラス

3名とも、本学国際交流センターが実施する日本語の授業を受講している。同センターでは、平成28年度現在、J-CATと呼ばれるオンライン日本語テストの結果に準じて、基礎1, 2, 中級1, 2および上級の5段階に分けられている。Aさんは上級に、BさんとCさんは中級2にランクされている。

インタビューから、協定大学における日本語クラスと、同センターの日本語クラスには大きな違いがあることが明らかになった。ライプチヒ大学においても、ハイデルベルク大学においても、ドイツ人教師と日本語教師が日本語授業を分担する。ドイツ人教師は、主にドイツ語を使った文法の授業を行うという。そして例えばハイデルベルク大学の場合においては、日本人教師は、2学期目以降は主に日本語を用いて、会話や漢字、読解、作文といった全般的な授業を行うとのことである。以下に、例としてハイデルベルク大学の日本語クラス（2学期）の例を示す⁶⁾。1コマは90分である。

表3 ハイデルベルク大学の2学期の日本語科目

	日本人教師	ドイツ人教師
授業科目名	①現代日本語2 ②漢字	教科書の文法
使用言語	主に日本語	主にドイツ語
コマ数/週	① 6コマ ② 2コマ 合計8コマ	2コマ 合計2コマ

表3は、2016年度夏学期（4月～9月）のハイデルベルク大学における2学期の科目である。これらの科目は、日本語が主専攻の学生であっても、副専攻の学生であっても、全て必修科目であり、受講が義務付けられている⁷⁾。

一方、本学では、本学に在籍するすべてのタイプ

の留学生、すなわち、学部正規生や研究生、修士課程および博士課程の大学院生、交換留学生といったあらゆる留学生が受け入れ対象となっている。つまり、本学で日本語を学ぶ留学生のうち、日本語を専門としている学生は一部であり、本学で所属する学部や研究科の専門科目の受講が最優先となる。そのため、国際交流センターが実施する日本語科目を全て受講できる学生ばかりがいるとは限らない。

例として、本学における平成28年度前期の中級1レベルの授業科目について以下に記す。1コマは90分である。

表4 三重大学における中級1レベルの日本語科目

	日本人教師	外国人教師
授業科目名	文法・読解 読解・作文 聴解 会話 中級へのステップアップ	
使用言語	日本語	
コマ数/週	合計5コマ/週	

表3と表4を比較すれば明らかなように、ドイツでの日本語クラスと本学における日本語クラスには大きな差がある。これは、上にも述べたとおり、ドイツの大学では、主として専門として日本語を学ぶ学生のためのコースであるために、必修科目として設定されているが、本学国際交流センターでは、日本語を専門としない学生にも開かれていることから、上記のような個別のスキルを伸ばす授業が独立して開講されていることが関係すると思われる。

ドイツの大学と本学国際交流センターの日本語クラスの主な違いとしては、以下の点が挙げられよう。

- (1) スキル別の授業か、総合的に行う授業か。
- (2) 共通言語が日本語以外にあるか。
- (3) 受講者の専攻が主に日本語であるか。
- (4) 1週間の授業時間数

本学交換留学生の来日のタイミングやレベル分け試験などの事情から、留学生に対する日本語の授業が本格的に始まったのが10月10日ごろからであり、インタビューした時点においては、日本語クラスが始まってから、まだ2, 3週間しか経っていなかった。それにもかかわらず、授業の形式面と内容面において、興味深いコメントが得られた。

まず、形式面に関しては、3名とも母語の異なる

学習者同士が同じクラスにいることについてはそれほど抵抗がないことが分かった。また、ドイツ語による授業説明が一切行われないことについても、むしろの方がよいと考えている人もいた。しかし、漢字語彙などは漢字圏の学習者にはかなわないことが多いため、同じレベルにランクされていても苦労しているとのことであった。また、そのことにも関連しているが、ハイデルベルク大学では語彙リストがあり、それを用いて予習をしていたため、本学の授業においても語彙リストがあるとありがたいとのことであった。特に漢字語彙は、非漢字圏学習者にとっては、漢字が読めなければ意味を調べるのにとっても時間がかかってしまうからである。

また、一部の授業の教育メソッドについてのコメントも得られた。例えば、4.3.2.で後述するようなアジア系学習者には受け入れられるような教授法であっても、ヨーロッパの学習者にとっては受け入れられないものがあるという意見もあった。

4.2.2. 日本人と学ぶクラス

筆者が担当している授業のうち、Aさんが受講している授業について、興味深いコメントが得られた。この授業は、日本人学生と留学生対象に開講されている授業であり、同じ教室でディスカッションを通して学び合うものである⁸⁾。以下に概要を示す。

表5 「留学生と学ぶ日本」授業概要

受講者	日本人学生（主に1年生）15名 留学生（上級レベル）28名
受講者の出身国	日本、中国、韓国、台湾、ドイツ、ベトナム、タイ、ウクライナ
授業の概要	あらかじめ順番が決められた座長と、座長が設定したテーマに関心のある学生が4～6人程度で一つのグループを作り、座長主導のもとディスカッションをする。 日本人学生も留学生も平等に一人1回座長を務める。
コマ数/週	1コマ

Aさんへのインタビューを行った10月下旬の時点では、本格的なディスカッションには入っておらず、教師があらかじめ準備したトピックについてディスカッションの練習を行っている段階であった。具体的には、以下に示すようなトピックについて、

4～6人程度の小さなグループに分かれ、それぞれ15分程度、話し合った。

以下の例は、これまでに実際に本学の留学生たちが体験したことのあるものであり、筆者らが留学生から複数回耳にしたことのある出来事である。このような練習のディスカッションの時間を設けることで、スムーズにディスカッションに移っていけるようにした。以下のトピック1を参照されたい。

ディスカッションのトピック1

留学生Aさんの悩み

「私はヨーロッパのB国から来ました。私が「はじめまして、私はAです。」と自己紹介したら、会うほとんどの日本人に「日本語うまいですね!」と褒められました。とてもショックでした。」

- (1) Aさんは、どうしてショックだったのでしょうか。
- (2) Aさんは、どのように接してもらいたかったのでしょうか。
- (3) たくさんの日本人は、どうして「日本語うまいですね!」と言ったのでしょうか。その日本人たちは、Aさんに対して悪意があったのでしょうか。

それぞれのグループには、必ず留学生と日本人学生が含まれるように調整した。また、グループはトピックごとに変えるようにして、その都度簡単な自己紹介をするよう指示した。(1)に関して、それぞれのグループからは、「自分なら、褒められたら嬉しいので、ショックを受けた意味が分からない」という意見や、「自分の日本語に自信がないので、嘘をつかれているかもしれないと思ってショックだったのではないか」、「ただ、簡単な挨拶をただけなのに、そんなに褒められるなんて、馬鹿にされているのではないかと思った」など、さまざまな意見が出てきた。また、(2)については、「普通に接してもらいたかったのではないか」、「そのまま自己紹介を続けてもらいたかったのではないか」、「具体的に何がどううまいのかを言って欲しかったのではないか」などの意見が出された。そして(3)については、誰もが「悪意は持っていなかったと思う」と答えた。「ただ、好意を示したかったのではないか」、「どう話しているのか分からなかったのではないか」という意見も見られた。

また、以下の例についても、上記と同様にグループに分かれて話し合った。

ディスカッションのトピック2

留学生Bさんは、コンビニでアルバイトしています。ある日、深夜バイトをしていると、酔っ払いが来ました。その人はBさんの名前を見て留学生だと分かり、「お前はC国人か。○○(場所の名前)は、日本のものだ。お前なんか、国へ帰れ!」と言いました。

- (1) あなたがBさんだったら、どうしますか。どのように考えますか。
 (2) あなたがBさんの友達だったら、どうしますか。

トピック2についても、トピック1同様、すべてのグループに留学生と日本人学生が含まれるようにした。

(1)については、「SNSにアップして、ほかの人にも知らせる」という意見や、「友達に愚痴を言う」という意見、「気にしない」という意見などさまざまな意見が見られた。また、(2)については、「Bさんが、自分と同じ国の人か、別の国の人かで慰め方が違う」という意見の人や「どの国の人でも関係なく、友達であれば同じように慰める」という意見の人もいた。

これらのディスカッションを通して、日本人学生にとっては、留学生がどのような思いをしているのか、どんな場面に遭遇しているのかについて、直接留学生の口から考えや体験談を聞くことになった。留学生にとっては、トピック1のような例において、日本人学生が悪意を持っているわけではないこと、好意を示そうと思っていることなどを確認した。そして、両者が今後どのようにしていくことで、よりお互いの理解が深まるのかについて考えていった。

Aさんは、来日前にドイツ人教師から「日本に行く、褒められることがあると思うが、その時は“まだまだです。”と答えるように」という指導を受けてきたという。しかし、今回来日して上記のように実際に日本人学生とディスカッションをすることで、日本人学生たちの生の声と正直な気持ちを聞くことができ、大変良かったと述べている。また、Aさんは、トピック1のような場合について、「日本人はそのままいてくれればよいが、留学生がどう感じるかということを知ってくれるだけでも嬉しい。」と述べた。またトピック2の例についても、前回の留学先でドイツ人の代表のように扱われた経験を思い出し、「自分をドイツ人の代表として見るのではなく、個人として接してほしい」と語った。

4.2.3. 授業以外での活動

授業以外の活動については、まず宿舎に関するコメントが見られた。3名とも本学の寄宿舎に住んでいるが、Aさんの宿舎は昭和63年に建てられたもので、本学の留学生用の寄宿舎では最も古い。Aさんは、衛生面においての不満があるが、他の学生たちと話し合いをしたり、事務室に交渉したりするなどして乗り越えようとしている。Cさんは平成27年に新しく建てられたルームシェアタイプの宿舎に住んでいる。Aさんは日本人1名と留学生2名の合計4名で住んでいるが、日本人学生が親切であるため、大変助かっているとのことであった。

寄宿舎以外では、Cさんからクラブ活動に関するコメントも得られた。Cさんは、積極的に情報を収集し、来日後間もないにもかかわらず、既にクラブ活動に参加している。現在、バドミントン部に入部しているが、バドミントン部で唯一のヨーロッパ人であるために、注目を浴びることもあるという。しかし、その状況に対して、悲観的にならずに楽しむことが出来ているようである。

4.3. ドイツ人留学生が本学に望むこと

4.3.1. 本学学生に伝えたいこと

本学からドイツの協定大学に留学しようとする学生に対して、伝えたいことはないかという質問に対しては、以下のような回答が得られた。

まず、Aさんからは、ライプツヒ大学には日本のようにチューターがないものの、JAAL (Japan Alumni Association Leipzig, 日本ライプツヒ校友会) という組織があるため、活用してほしいとのことであった⁹⁾。また、ドイツの日本学専攻の学生たちは、いつも日本語のタンデムパートナーを探しているの、すぐに見つけることができるだろうとのことであった¹⁰⁾。JAALのほか、タンデムパートナーもさまざまなことを手伝ってくれるため、そのような存在を知っておいてほしいとのことであった。

Bさんからも、Aさん同様にドイツ人の友達の見つけ方についてのコメントがあった。すなわち、ドイツ人学生の中にはシャイな学生もいるが、学生たちは日本人の学生と友達になりたがっているの、是非勇気を出して声をかけてほしいということであった。また、ハイデルベルク大学には「日本語を話す会」という会が学期に3度開かれており、そこには日本語を話したいドイツ人が集まるので、是非その会にも参加してほしいとのことであった。そのほか、日本からの小さなお土産が歓迎されるであろう

こと、お金は多めに持ってきておいたほうが良いであろうことを述べた。

4.3.2. システム面におけるコメント

他大学への留学経験を持つAさんは、当時の経験を踏まえて、本学にも求めるものがあるという。それは、ぜひ本学においても、ライプチヒ大学について紹介するチャンスを作って欲しいということであった。

本学からドイツの大学にライプチヒ大学に留学する学生は大変少なく、これまでに合計3名しかいない¹¹⁾。その理由について、Aさんは、本学の学生にライプチヒの魅力が十分に伝わっていないからだろうと考える。そこで、留学を考えている学生に対して、ライプチヒ大学について説明する機会を作って欲しいということであった。

BさんとCさんは、平成28年4月1日から9月30日まで行われた、本学とハイデルベルク大学の日本語担当教員交換事業を高く評価しているとのことであった。日本語担当教員交換事業とは、両大学の日本人日本語教員が半年間交替し、それぞれの大学で日本語クラスを中心とした全般的な業務に携わるというものである。BさんとCさんは同事業を以下のように評価している。

まず、学生にとってのメリットとして、「日本語授業に関するメリット」と「留学前に留学先の教員と知り合える安心感」という2点が挙げられた。日本語授業に関するメリットとしては、教師の交換によって、ことなつた授業方法や教授法に触れられるという点である。また、日本から来た教師の授業を受けることは、「生きた日本語」に触れることができるとも考えている。ハイデルベルク大学の日本語教師も日本人であるが、ドイツでの生活も長く、ドイツ事情に詳しい教員にはない新鮮さがあると考えようである。

また、BさんとCさんは、本学留学前にドイツで本学の教員を知ることができたのであるが、Cさんは、留学に際して「三重に行っても、一人ではない」という安心感が生まれたという。

次に、BさんもCさんも、日本語教師にとってのメリットも指摘している。それは、教師にとって異なつた教育環境を知ることが、今後の教育に役立てられると考えるからであるという。本学、そしてハイデルベルク大学双方の教育・学習環境など、身を以て体験することができるからである。また、それは、単なる人材の交換に留まらず、文化の交流にも

つながり、両大学に大きなメリットとなるだろうと述べた。

現在、二名が本学で受講している日本語クラスでは、4.2.1.でも述べたとおり母国の授業と異なる点も多い。母国の教材には、必ず語彙リストが付されているが、本学では語彙リストがない授業も少なくないという。また、文法用語にしても、本学国際交流センターでは「テ形」「タ形」などといった日本語教育で一般的に用いられる用語を使用しているが、ハイデルベルク大学では「連用形」「終止形」といった用語を用いるという。このように、些細に見えるひとつひとつの違いについても、教師が直接体験し、学習者の反応を見ることができることが教師にとっての成長につながるだろうと感じているとのことであった。

また、日本語教育では一般的に行われている授業メソッド、すなわち教師の後に学生が続けて発音する「リピート」と呼ばれる練習方法について、アジアの学生にとっては有効かもしれないが、ヨーロッパでは一般的に行われておらず、学生が好んでやらないとのことであった。そのようなことについても、講師が異なつた環境で授業を担当することで、実際に学生の反応を感じることができるのではないかとのことであった。

5. 今後の可能性

5.1. 受け入れ・派遣前の教育

Aさんは、現在、上級クラスで日本人学生とともにディスカッションしているような内容を、是非他の日本人学生にも知ってもらいたいという。

日本人学生の「内向き志向」には、海外での生活や対人関係に対する不安も関係していると言われることから(小島他 2014)、このようにして留学生と日本人学生がディスカッションをするような場は大変貴重かつ重要であると考えられる。今後も、このような授業を展開し、留学生と日本人学生が一定期間交流を続けていくことで、留学に対しての不安が軽減されていくのではないかと考える。

同様に、渡航前オリエンテーションの実施の可能性についても考えていきたい。笹田(2015)は、50年近く行われているフルブライト奨学金の渡米前オリエンテーションの意義について紹介している。笹田は、インターネットの普及により、情報収集の難易度が飛躍的に下がったものの、インターネットをはじめとしてあらゆる情報通信手段が発達した現代では、不正確なものも含め逆に雑多な情報があふれて

いると指摘する。そのような中で、「顔が見える」オリエンテーションを実施し、パネリストである留学体験者を「疑似体験」することで信頼性の高いオリエンテーションが可能になるという。また、顔が見える安心感、場を共有することで生まれる「グループ・ダイナミクス」は、「自分はひとりではない」という安心を生み出すことに寄与すると述べる。これは、4.3.2.でも述べた C さんのコメントにも通じるものがある。C さんは、ドイツで本学教員との交流があったことで「自分はひとりではない」と感じたという。このような安心感が与えられるような環境づくりが、今後より充実した留学システムを構築していくのに重要ではないかと考える。

5.2. 今後の課題

本稿では、来日して1か月以内のドイツ人留学生3名に、本学への留学動機や準備状況、ドイツと日本の教育の違い、本学に求めるものなどについてインタビューしたが、今後は本学の留学を終えた際に、来日前の目標はどの程度達成できたのか、留学にどの程度満足しているか、来日前とどのような点が変わったかについても調査してみたい。

また、本稿では、中国に次いでドイツからの交換留学生が多いという事実について触れ、本学からの派遣に関してはドイツが最も多いという点について言及したが、ドイツからの留学生が多いこととドイツへの留学が多いことに、どのような因果関係がみられるかについては分析を行うことができなかった。今後は、ドイツに留学する日本人学生にも調査を行うなどして、受け入れと派遣の関係についてより詳しく見ていくことで、本学からの派遣に関する課題も考えていきたい。

注

1) 平成28年度の派遣については、平成29年1月にも募集があるため本稿のデータには含めないこととする。しかし、平成28年度の交換留学生の受け入れに関してはすでに終了しているため、本稿のデータに含めた。

2) J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) とは、筑波大学が開発したコンピューターテストのことである。聴解、語彙、文法、読解の4つのセクションから成り、出題される問題と問題数は、受験者の解答の正誤によって変化する。受験時間も受験者によって変わり、45～90分程度かかる。このテストの点数によって本学国際交流センターのレベル分

けを行っている。

3) 紙幅の都合上、学部生の交換留学生である特別聴講生の特聴生、大学院生の交換留学生である特別研究生の特研生、日本語・日本文化研修生を日研生と省略した。なお、日本語・日本文化研修生には大学推薦(本学の交流協定校)と大使館推薦(本学の交流協定校ではない)があるが、本稿で扱う日本語・日本文化研修生は、大学推薦であるため、その他の交換留学生と併せて本稿のデータに含めることとした。

4) ワーキング・ホリデー制度とは、二つの国・地域間の取り決めに基づき、それぞれの国・地域が、相手国・地域の青少年に対して自国・地域の文化や一般的な生活様式を理解する機会を提供するため、自国・地域において一定期間の休暇を過ごす活動とその間の滞在費を補うための就労を相互に認める制度である。1980年にオーストラリアとの間で開始され、2000年12月からドイツとの間でも開始された。

5) 日本語能力試験とは国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催する日本語テストであり、世界的に実施されている。レベルはN5からN1まであり、N1が最も難易度が高い。N1では幅広い場面で使われる日本語を理解することができるレベル、N2では日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができるレベルである。

6) ドイツの大学は10月に開始する。1学期目は、10月から3月までであるが、ハイデルベルク大学日本語科目の場合、1学期の試験に合格した者のみ、翌年4月から9月まで行われる2学期を受講することができる。同様に、2学期の日本語科目に合格した者が、次の3学期の授業を受講できるシステムになっている。

7) ただし、他専攻の学生がまれに聴講を希望して授業に参加することもある。

8) この授業は本学教養教育科目および国際交流センターの科目として開講されており、日本人学生も留学生も受講することができる。

9) JAAL(Japan Alumni Association Leipzig, 日本ライプチヒ校友会)とは、もともと千葉大学の留学生にライプチヒについての情報を提供するために設立されたが、現在はライプチヒ大学の協定大学である日本の他大学の留学生も利用できる組織である。

10) タンデムとは、ドイツ語で二人乗りの自転車のことであり、タンデム学習とは、この自転車に乗る

ときのように外国語を学ぶ学習者同士がペアとなって互いに学習しあうという外国語学習の方式である。ドイツでは、ごく一般的な学習方法として定着している。

11) 本学からライプツヒ大学への派遣は、平成 24 年に 1 名(人文学部)、平成 25 年に 1 名(生物資源学部)、そして平成 27 年に 1 名(人文学部)である。

参考文献

- 小島奈々恵他(2014)「日本人大学生の海外留学に関する意識調査-「内向き志向」と留学意思の関係-」『総合保険科学』広島大学保健管理センター研究論文集 Vol.30. 21-26.
- 小林明 (2011)「日本人留学生の海外留学阻害要因と今後の課題」『留学交流』5月号, 1-17.
- 笹田千鶴 (2015)「渡米前オリエンテーション-「情報」と「体験」-もう一つのネットワーキング- Pre-Departure Orientation Program: 人留学生の海外留学阻害要因と今後の課題」『留学交流』5月号, 1-17.
- 宮下博幸(2016)「ドイツ語と日本語のタンデム学習の試み:成果と今後の課題」『言語教育研究センター研究年報』19: 141-150.
- 外務省「ワーキング・ホリデー制度」
(http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/visa/workin_g_h.html) (2016年11月1日)
- ハイデルベルク大学日本学研究所「Austausch」
(<http://www.zo.uniheidelberg.de/japanologie/studium/austausch.html>)(2016年11月14日)
- 三重大学「国際交流協定締結機関地図」
(<http://www.mie-u.ac.jp/international/international/map/>)(2016年11月14日)

SUMMARY

In this study we concentrated on Germany, the country with which our university has the closest relationship and we performed semi-structured interviews with 3 German exchange students, who arrived in Japan in October 2016. The interviews revealed their reasons for selecting our university and what activities they are participating in at our university. The interviews revealed that the students have specific reasons for coming to

Japan, and that our university has areas for improvement in Japanese teaching and in management. Moreover, we also found that teacher cooperation and exchanges were possible between the teachers in Japan and Germany, and that orientation lectures about life and studying in Germany are necessary when students from our university go to study in Germany, as are orientation lectures about life and studying in Japan for students who come to Japan.

KEYWORDS: German students, reason for studying abroad, orientation about life and study abroad, teacher exchange

† Chizuko Mastuoka* and Akiko Hattori*2 : On the motivation for German students to study at Mie University

* Organization for the Development of Higher Education and Regional Human Resources, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan

*2 Faculty of Education, Mie University 1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan